

市民



大館発明クラブの戸田会長と室内リポーター(右)

ムに展示する。生徒が互いに刺激となるように工夫している点などを話し合い、クラブの活動実績を交換しあつた。

後日、戸田会長さんにお話を伺う機会を得た。大館発明クラブは昭和五十七年一月十六日、市内のホテルにおいて発足会を開催、全国二十四番目の誕生となる。

初代会長に堺谷哲郎氏、事務局長には大槻一氏、内藤捷美氏、乳井省衛氏と交代しながら諸先輩・諸先生のお力添えを得て、今日のこのような発明クラブに成長できたと

最高賞受賞について。子どもの資質はもちろんだが、保護者の協力に負うところが多い。素晴らしいアイデアが子どもにあっても、保護者の理解なくしては立派な作品は生まれない。

述懐なさっていた。

大館少年少女発明クラブの場合、会員数が二十人前後で話が最も通じやすく、ものを作る喜びや考え方が急速に伸びる小学生が中心。半分はお母さんと一緒にいる年齢。特長は指導者の人数(四十五名)が群を抜いて豊富なこと。

大槻少年少女発明クラブの場合、会員数が二十人前後で話が最も通じやすく、ものを作る喜びや考え方が急速に伸びる小学生が中心。半分はお母さんと一緒にいる年齢。特長は指導者の人数(四十五名)が群を抜いて豊富なこと。

大槻少年少女発明クラブの場合、会員数が二十人前後で話が最も通じやすく、ものを作る喜びや考え方

述懐なさっていた。

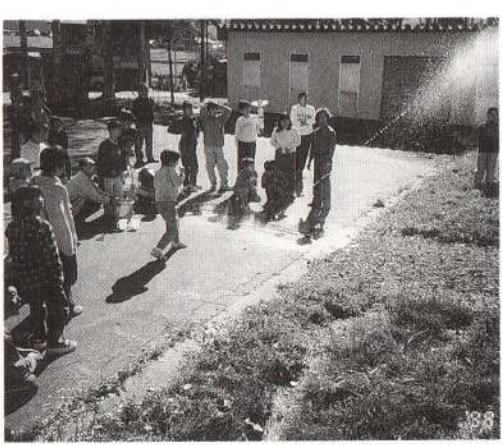
大館郷土博物館の二階にある発明クラブの工作室。私の訪ねた十

月三日は、完成間近という段階。

ロケット一本を作るのにボトル

五個は必要という。子どもたちは真剣そのもの。水平に押さえている子、金づちで打つ子、まなざし線は一つだったのが強く印象に残った。

乳井先生はくるくる回って飛んでいくロケットを手元に回収させて、垂直尾翼の手直しを指示し、再度の飛行に成功させた。こどもたちに原因を教えていた姿に、私は教育者としての師表を強く感じた。



活動として、地区発明くふう展を毎年開催している。その地区展で、特賞に入賞した子どもと保護者に集まって頂き、「合評会」を開きます。そこで、発明クラブの指導者は持ち寄った作品の一つ一つについて改善点を指摘し、全県展に備え更に考案度の高い作品に仕上げるように督励します。

また、今年からは発明クラブ専用の教室もでき、工作室を挟んで用具棚がついて理想的な環境。当局の配慮に改めて感謝したい。

九月十九日から製作が始まった「ペットボトル・ロケット」作りをリポートしてみました。

昨年は自転車の空気入れで空気を圧搾したが、先生も疲れてダウン。今年は電動コンプレッサーを用意して圧搾空気に万全を期す。先生がロケットに装着し、子どもたちも先生のまわりで右往左往する。

ロケットの飛行実験を終了して子どもたちを教室に集め、今日を締めくくるあいさつがあつて解散する。

私も子どもになつて、発明クラブにいれてほしい! そんなことを思いながら帰途につく。おわり

